



ひるの星

No. 239

もくじ	
バハオラの言葉	2
沖繩の子供	3
クイズ	8
親切な舌の工作	9
点でなぞる	10
皆の写真	11
皆の工作	12
両親のページ	13



やさしい舌

とつぜん ち み さけ いえじゅう ひび おかあ だいどころしごと
突然、血を見たような叫びが家中 に響きました。お母さんが台所 仕事を
ほう だ しんしつ か こ ほうら かわれ
放り出して寝室 へ駆け込みました。そこでシャラがリヤズの腹にまたがって彼の
かお ひ かあ み うで
顔を引っかこうとしているのをお母さんは見つけました。リヤズはシャラの腕を
つかんで、それをひっし と 止めようとしていました。ひめい
つかんで、それを必死で止めようとしていました。悲鳴をあげているのはリヤズ
ではなくシャラでした。それを見てもアスマは笑っていません。モナはシャラをリ
ヤズから離そうとしていました。いちばんとしした な
一番年下のアニサはベッドで泣いていました。
かあ へや はいって く わ うご と だま
お母さんが部屋に入ってくるのが分かれると、みんな動きを止めて黙ってしまいま
した。ただアニサ一人が泣いているだけでした。「アニサ、どうしたの？」と
かあ こえ ききま な こた
お母さんが声をあげて聞きました。アニサは泣きながら答えました。「シャラとリ
ヤズがけんか しているのだもの。」お母さんはアニサを抱き寄せて言いました。「彼ら
だいじょうぶ
は大丈夫よ、アニサ。でも、どうしてけんか になったの？」するとシャラが答えま
した。「リヤズが私のことをシミ、ソバカスと言ってからかったのよ。それから私
かみ ちぢ かみ い わら
の髪が縮れてピエロのような髪だとも言ったのよ。」リヤズが笑いながら言いまし
た。「そう、だからシャラがおれ かお つめ ひ かあ
た。「そう、だからシャラが俺の顔を爪で引っかこうとしたのさ。」お母さんは
ためいき につきながらシャラをひざ の に乗せました。「リヤズの顔には前にはあなたに
ひ 引っかかれた傷がまだ残っているのよ。リヤズにはあなたがどれだけ傷ついたら
ことば かえ あか かお な こた
は言葉で返すのよ。」シャラは赤い顔して泣きながら答えました。「だってママ、

リヤズは私^{わたし}がどんなに注意^{ちゅうい}したってからかい続ける^{つづ}の^{はら}だもの。だから腹^たが立って、
ママ...」お母さんは言いました。「リヤズ！あなたが引^ひつかかれる傷^{きず}と同じくらい
あなたの言葉^{ことば}はシャラを傷^{きず}つけるのよ。アブドル・バハは、誰^{だれ}でも人^{ひと}の魂^{たましい}を
傷^{きず}つけるくらいなら生まれてこ^うないほうがましだと言われているのよ。それから
優しい舌^{した}は人^{ひと}を引き付け^{ひつ}る磁石^{じしやく}だとバハオラが言われているのよ。優しい言葉^{ことば}に
人々^{ひとびと}が引^ひきつけられるからよ。ところで優しい言葉^{ことば}のお話^{はなし}があるのよ。そのお話^{はなし}
をしてみようかな？」、「うん！」みんな叫^{さけ}びました。そして、みんなお母さん^{かあ}の
まわりに集^{あつ}まりました。みんなお話^{はなし}が大好きです。「さてと。」お母さん^{かあ}がお話^{はなし}を
始^{はじ}めました。

昔^{むかし}、あるところ^{ふたり}に二人^{しまい}の姉妹^{いもうと}がいました。妹^{やさ}は優しい舌^{した}の持ち主^もでした。彼女^{かのじよ}
はいつも誰^{だれ}にでも優^{やさ}しく心地^{こち}よい言葉^{ことば}で接^{せつ}しました。そして、いつも礼儀^{れいぎ}正^{ただ}しくて
いねいでした。姉^{あね}はこれとは全く^{まった}反対^{ほんたい}でした。姉^{あね}はいつも失礼^{しつれい}で嫌味^{いやみ}たらたらで
した。そして、誰^{だれ}にでも意地悪^{いじわる}でした。ある日^{いもうと}、妹^{みずく}は水汲^{いど}みに井戸^いへ行^いきました。
井戸^{いど}のそば^{みし}で見知らぬおばあちゃん^{すわ}が座^みっているのを見^みつけました。妹^{いもうと}は、そ
のおばあちゃんに丁寧^{ていねい}に挨拶^{かわ}をしました。そのおばあちゃん^{かわ}はのどが渴^{かわ}いたので、
妹^{いもうと}に井戸水^{いど}を持^{みず}って来^もてくれるように頼^きみました。妹^{いもうと}は
そのおばあちゃん^{いっばい}にコップ^{みず}一杯^{ていねい}の水^{みず}を丁寧^{ていねい}に



差し出しました。妹^{いもうと}が立ち去ろうとしたとき、おばあちゃんは妹^{いもうと}の礼儀正しい
振る舞い^{ふま}に感謝^{かんしゃ}してお礼^{れい}がしたい^いと言いました。そのお礼^{れい}とは妹^{いもうと}の口^{くち}から言葉^{ことば}
が出る度^{たび}に美しく素晴^{すば}らしい価値^{かち}あるものがこぼれ出るとい^でうものでした。妹^{いもうと}
はおばあちゃんの申し出^{もうで}を喜^{よろこ}んで受けました。するとどうでしょう。早速^{さっそく}妹の口^{くち}
から真紅^{しんく}のルビーがこぼれ出^でたではありませんか。妹^{いもうと}はとても驚^{おどろ}いて急^{いそ}いで家^{いえ}
に帰^{かえ}り着くと、このことを母親^{ははおや}に話^{はな}しました。そこに姉^{あね}もたまたま居合^{いあ}わせました。
妹^{いもうと}の優^{やさ}しく愛^{あい}らしい話^{はな}し方^{かた}で口^{くち}を開^{ひら}くたびに美^{うつく}しい花^{はな}や宝^{ほう}石^{せき}やまばゆいばかり



に光^{ひか}り輝^{かが}く蝶^{ちょう}々^{ちょう}が次^{つぎ}々^{つぎ}とこぼれ出^でました。これを見^あた姉^ねは妹^{いもうと}

に嫉^し妬^つして自^じ分^{ぶん}もこれにあやかろうと^いして井^い戸^どのほう^{ほう}へ走^{はし}って

行^いきました。そこで見^みつけたおばあちゃんに向^むかって「ねえ、ち

よっと、あんた。私^{わたし}の妹^{いもうと}にあげ^あげたプレ^ぷゼ^れント^{んと}を私^{わたし}にも頂^{ちやう}戴^{だい}！」おばあちゃん

は振^ふり向^むいたけれど、その失^{しつ}礼^{れい}な姉^{あね}の言^{こと}葉^ばが聞^きこえない振^ふりをし^しました。「ねえ、

そこのばあちゃん。私^{わたし}にも魔^ま法^{ほう}を^まか^かけてお^おくれよ。」

ここでお母^{はな}さんは話^{はなし}をや^やめ^めて一^ひ休^{やす}みし^しました。「ねえ、みんな、このおばあち

ゃんはこ^{なに}こ^おで何^{なん}をし^したと思^{おも}う？」リヤズが飛^とび上^あって叫^{さけ}びま^ました。「その姉^{あね}をカエ

ルに^か変^へえてしま^まったのだら^らう？」みんな^{わら}笑^{わら}ってしま^まいました。お母^{かあ}さんが

答^{こた}えま^ました。「いいえ、違^{ちが}うの。でも、それによく似^にたこと^こが起^おこったの。」お母^{かあ}さん

は話^{はなし}をつ^つづ^づけま^ました。

つぎにその姉が礼儀知らずの言葉を発したとき、姉の口からゴキブリが出てきました。姉は悲鳴をあげてゴキブリを吐き出しました。その後も姉が汚い言葉を発するたびにウジ虫やムカデやかぶと虫などが口からこぼれ出るようになりました。姉は泣きながら家に走って帰りました。それからというもの姉がうそを言ったり汚い言葉を発したりするたびに、このようなことが起きるようになりました。



「それでは姉は何もしゃべらなくなったのでは？」とアスマが言ったので、みんな笑いだしました。お母さんがみんなに言いました。「悪口は心の灯を消し、魂の命までも消し去るとバハオラが言われているのよ。悪口が一番良くないのよ。だから他の人のことはよいことだけ言うようにしましょう。他の人の良いところを探して言うようにしましょう。ああそうそう悪口について面白いお話があるのよ。みんな聞きたい？」「やったー。聞きたい！」子供たちはみんな叫びました。口からゴキブリが出てくるのを一番嫌がるアニサが「お願い、ママ。」とねだりました。

昔、あるところにいつも他人の悪いところばかり見つけて噂を流す女の子がいました。ある日、女の子のおばあさんが訪ねてきていて、女の子のこの様子を見てとても悲しくなっていました。そこでおばあさんは女の子がその日いちにちだれかの悪口を言ってしまったら、そのたびに羽根を空に飛ばすように女の子



こ 子に言いました。おんな 女の子はそれはとても おもしろ 面白そうだと おも 思って喜んで はね 羽根の はい 入った
ふくろ 袋を持って そと で 外に出ました。 さっそく 近所の 犬の こと で 悪口 を 言った ので、 はね 羽根を 空に
ふ と 吹き飛ばしました。 それから 友達に ほか の 友達 の 洋服 の こと で 悪口 を 言って、 また
はね 羽根を 空に 吹き飛ばしました。 この ように 女 の 子 は その 日 誰か の 悪口 を 言う た び



に はね 羽根を 空に 吹き飛ばしました。 その 夜、 女 の 子 は おばあさん に 空っぽ にな
った 袋 を 見られる のが 恥ずかしく なりました。「私 っ て、 明日 は 今日 以上 に
はね 羽根 が 必要 になっ て くる わ。」 と 女 の 子 が 言う と おばあさん が 言いました。「い

いえ、 その 必要 は ない のよ。 明日 は 吹き飛ば した 羽根 を 全部 拾い 集めて 袋 に 戻す
のよ。」 女 の 子 が 叫びました。「おばあちゃん！ そんな こと 出来 っ こ ない わよ。 今
ごろ はね 羽根 は 街中 に 飛ん で いる わよ。」 すると、 おばあさん は 首 を 横 に 振っ て
い 言いました。「そう ね、 お前 が 言った 悪口 も 同じ ね。 その 悪口 は 取り 返し の

つか ない 害 を まき 散ら して しまっ た のだ よ！」 その とき、 やっ と 自分 の した
こと に 気付 きました。 そして、 自分 の 舌 に 気 を つけ なく て は と 思 いました。



お母 さんが みんな に 言 いました。「さあ、 みんな、 舌 は 良い こと を 言う た め

に 使 う よう に と バハオラ が 言 われた こと を 思 出 す のよ。」 その とき モナ が
さけ 叫びました。「ママ、 何か こげ ている よう だわ。「ああ、 そう だ、 夕 食 だ。」 お母 さん
が 叫び なが ら 部屋 を 飛び 出 して いく の を 見 て、 みんな 吹き 出 して しま いました。

おわり



クイズ

- 1 言葉が磁石のような働きをするのはどんなときですか？

- 2 親切な舌はどうして磁石のようなのでしょうか？

- 3 どうしてシャラはリヤズにそんなに怒っていたのでしょうか？

- 4 最初の物語で親切な舌の女の子はどうなったのでしょうか？

- 5 親切ではない舌の女の子はどうなったのでしょうか？

- 6 二番目の物語で女の子は羽根の入った袋で何をするのでしょうか？

- 7 次の日この女の子は羽根をどうするように言われたのでしょうか？

- 8 どうして女の子は羽根を集められなかったのでしょうか？

- 9 羽根は悪口と同じようにどうなるのでしょうか？

- 10 私たちの舌は何のためにあるのでしょうか？



どうでしたか？全部答えられましたか？

答えは両親のページにのっています。



しんせつ した こうさく 親切な舌の工作

ざいりょう 材料

かみ ねんど
紙、粘土

え ぐ
絵の具

えふで
絵筆

あか もぞうし
赤い模造紙

のり

つく かた 作り方

1 かみねんど まる 紙粘土を丸めてボール（顔）を

つく
作る。

2 ボールのま なか 真ん中をつまんで鼻

をつく、えふで め か
を作り、絵筆で目を描く。

3 ほか ねんど みみ かみ つく
他の粘土で耳と髪を作る。

4 ボールにあな くち くちびる
に穴をあけて口と唇

をつく
を作る。

5 かお かわ あいだ あか
顔を乾かしている間に赤い

ほうせき はな ちょうちょう
宝石、花、蝶々などの可愛いシー

ル、または、ゴキブリ、ムカデ、毛虫

などなに き も わる
何か気持ち悪いもののシール

もぞうし なが した つく
模造紙で長い舌を作る。

6 なに かわいい した のりづ
何か可愛いものを舌に糊付け
する。

7 なに きも わる
何か気持ち悪いものをもう

ひと した のりづ
一つの舌に糊付けする。

8 かお かみ いろづ
顔や髪に色付けする。

9 できあ かお した のりづ
出来上がった顔に舌を糊付け
する。

みな しゃしん
皆の写真





みんなの^{こうさく}工作



両親のページ

私たちの周りの子供に優しく親切で正直な舌を持つように望むなら、私たち大人が模範を示さなければいけません。子供は最高のコピー機です。しゃべるのも私たち大人の真似をします。私たち大人は常に子供の前でしゃべるときは気をつけなければいけません。お互いに尊敬し合い、礼儀正しくしなければいけません。大人の大声やきつい声よりも優しい声で子供のマナーを正すことが出来るはずですが、また決して他の人やましてや子供も知っている人の悪口を言うのは止めなければいけません。というのも子供は大人の真似をするだけでなく、さらに悪いのは両親、祖父母、先生、社会のリーダーなどを尊敬しなくなります。

子供の前で誰かの悪口を言えば子供の魂の灯を消し去るばかりか、子供がその人や他の大人との絆を永遠に失い、誰も信じられなくなると、神の大業の翼成者、フェイジー氏はおしゃっています。

「悪口は心の灯を消し、魂の命を滅ぼすものなり。」

バハオラ



クイズの答え

- 1) 優しい言葉であるとき。
- 2) 人を引き付ける力があるから。
- 3) リヤズがシャラをからかったから。
- 4) 口からきれいなものが出てきました。
- 5) 口からきたないものが出てきました。
- 6) 人の悪口を言ったときに袋に入った羽根をばらまきました。
- 7) 羽根を全部袋に戻すように言われました。
- 8) 羽根はどこに飛んで行ったかわからないから。
- 9) 羽根はあちこちに飛んでいってしまって、悪口と同じように元に戻ません。
- 10) 舌はみんながする良いことを言うためにあります。



皆さんのお子様のバハイ活動でみんなに役に立つ
いいお話、又は写真などがあれば、送ってください。
vb7mb7@bma.biglobe.ne.jp に送ってください。

ひるの星

№. 239

2009年9月発行

ひるの星をカラー印刷するには以下のリンクにアクセスしてください。

<http://www.bahaijpn.com/daystar.htm>

日本バハイ全国精神行政会

〒160-0022 東京都新宿区新宿7丁目2番13号

電話：03-3209-7521 FAX：03-3204-0773

ひるの星委員会：平原静志、平原ルアナ、マックティアー・理恵

協力

物語：平原ルアナ

和訳：平原静志、平原朝真

工作：カレンとアンアガデンア

写真：

表紙：ダリル・マード

絵：ラリー・カーティス、子供クラス、平原ルアナ、
ダリル・マード、サナ・マジズーブ

テクニカル・アドバイザー：尊田望、平原朝真

監修：平野祐一